

17
スリランカ

民衆の娯楽と支配者の娯楽

中村尚司

遊びごころ豊かな
スリランカ人

スリランカの民衆は遊び好きである。釈迦如来の教えを最も原形に近い
伝えて信じている敬虔な仏教徒の多い地域だから、民衆が歌舞音曲を敬
遠する生活をしているに違いない、と誤解する人もある。しかし、実際
には生活感情を歌や踊りで表現することにかけて、スリランカの人々ほどすぐれた生活文化を
もっている民族を採すのは難しいくらいである。お祭りの日だけではない。悲しいこと嬉しい
ことに会おうと、平静を装うよりも日本人の眼には大げさに感じられるくらい、身体全体で表
現しようとする。それが民衆文化の基礎にある。

例えば、学校で期末試験の結果が発表されると、掲示板の前で肩を組んで踊っている生徒た
ちを見るのは珍しいことではない。農村の暮らしでも、仕事より遊びに熱中している村人たち

が少なくない。お正月やウエサク祭（釈迦の生誕と正覚をいわう祝日）だけではない。仏教徒でも、カタラガマ神やパッティニ女神など、ヒンドゥの神様のお祭りを盛大にする。直射日光がいくらか穏やかになる時刻からたそがれどきまで、溜池や小川のそばで、入浴や洗濯のかたわら四方山話がつきない。男どもは、暗くなっても密造の椰子酒を飲み交わしながらゴシップに花を咲かせたり、賭け事にふけったりする。

村の雑貨屋の役割も基本的には、このような遊びや社交の場を提供することでもある。その意味では農村の娯楽産業は、雑貨屋や茶店であるということもできる。スリランカ人は旅行が好きである。農閑期には、北端のナーガディーバ寺院や南のスリ・パダ（仏足跡山）などへ巡礼の旅に出る。街道筋に彼らの宿泊施設であるアンバラマや飲食店も多い。しかし、スリランカでは誰も、このような憩いの場を産業とは考えないであろう。

植民地支配と娯楽産業

娯楽産業は、民衆の遊びとはまったく別に、ヨーロッパ列強の植民地支配とともにやってきたとみなされている。民衆の遊びと無縁な世界に、娯楽産業が誕生したのである。

その典型的な例は、西洋と東洋とを結ぶ海上交通の要路となった、コロンボ港の娯楽施設である。在留西洋人に加えて、船員や船客の旅の疲れを慰めるためのホテルやナイトクラブが、外国人向けの娯楽産業として成立した。ゴルフやビリヤードのような施設も、競馬のような公

認の賭博も、売春のような非公然の地下産業も外国人専用の形で運営されてきた。コロンボ在住の西洋人や山地のプランテーション経営者が島内の地方旅行をするための宿泊施設や避暑地の施設もまた、スリランカ人の遊びの世界とは接点がなかった。

一九四八年に政治的な独立を達成した後も、このような外国人用の分離施設が存続していた。私が留学した六〇年代になっても、コロンボ・スイミングクラブは、白人だけが会員であった。またセイロン銀行が国営化された六四年に、同行が直営していたタプロバン・ホテルのナイトクラブ「ブルー・レオパルド」を閉鎖するかどうかが大きな論争の的になった。けれども、スリランカの民衆にとっては無縁な議論でもあった。

カジノ賭博場盛衰記

近年、盛衰の激しかった娯楽産業の典型は、カジノ賭博場である。この産業は、一九八〇年代に入ってから急成長した。主要な観光ホテルだけでなく、コロンボの目抜き通りであるゴール・ロードには、日本のパチンコ屋のようなだけばしいカジノのネオンが軒を並べて、異様な景観を形成した。人民解放戦線の反乱を鎮圧するため、非常事態宣言が布告され夜間外出禁止令が施行されていても、外貨獲得という名目によりカジノだけは徹夜の営業が公認されていたほどである。一晚で数十万ドルを稼いだというような噂話が、在留邦人の間でささやかれていたものである。

しかし、一九九〇年代になってスリランカ政府の幹部とカジノ経営者の利害が対立し、全面

的に閉鎖されてしまった。カジノの主要な顧客は観光業者に加えて、タイ人の宝石商と日本のビジネスマンであったから、これまたスリランカ民衆には無縁の娯楽産業盛衰史である。

最大の娯楽産業は映画

西洋起源であるにもかかわらず、スリランカにおける近代産業として大成功した娯楽は映画産業である。最初は、欧米の映画とインド映画の輸入が中心であった。タミル語を母語とする住民が、スリランカ人口の約三割を占める。そのため、マドラスで制作されるタミル映画に人気が集まり、その輸入が増えた。ヒンディ語を理解するスリランカ人はほとんどいないが、都市でも農村でもヒンディ映画の上映が続いている。ひとつの映画のなかに、歌、踊り、アクション、ギャグ、恋物語など多くの要素が組み入れられているインド映画の特徴が、スリランカ民衆の好みに合致したのであろう。

インド映画の成功に刺激され、スリランカでも映画づくりが始まり、たちまちのうちに最大の娯楽産業に成長した。タミル映画はインドからの輸入が続いているものの、シンハラ映画は一九五〇年代には民衆文化の主要な担い手になった。それ以来、映画産業の影響力は大きく、流行歌ばかりでなく舞台芸術や文学作品まで、映像文化と無関係には存在できなくなったといわれる。日本や欧米諸国とは異なり、テレビの普及が遅れているので、いまなお最大の娯楽産業である。

映画は現実の困難な暮らしを变革し、一握りの支配階級の抑圧から民衆を救済する夢を与え

る。そのような正義の味方を演じなければ、映画スターとして成功できない。逆にいえば、成功した映画スターには、選挙に出れば間違いなく当選する大衆政治家への道が開かれている。この点でも、インド映画スターの成功がスリランカのお手本であった。一九八〇年代に彗星のごとく政界に登場し、時代の指導者と囑望されたクマール・ヴィジャヤトゥンガ人民党委員長は、その代表例である。このヴィジャヤトゥンガ委員長が暗殺により非業の最期を遂げた八八年二月、コロンボ市の総人口より多い民衆が葬儀に参列した。

その翌年最大の人気スターであるガミニ・フォンセカが統一国民党から立候補し、その勝利に貢献したという功績により、一年生議員であるにもかかわらず、議会の副議長に選出された。

これらの事実を、映画が単に娯楽産業にとどまらず、スリランカ政治を左右する力を持つに至ったことを教えてくれるのである。

(なかむら ひさし／龍谷大学教授)